

## *Cymbeline* における Cloten 斬首場面の意味と劇的効果

スミザース 理恵

### [要約]

本稿は、*Cymbeline* (1609-10) の演劇的コンテキストにおける Cloten 斬首場面の役割と意味を考察するものである。Shakespeare が所属した劇団 (The Chamberlain's Men/ The King's Men) で道化役者として活躍した Robert Armin が Cloten を実際に Globe 座の舞台上で演じた姿を、David Wiles の *Shakespeare's Clown—Actor and Text in the Elizabethan Playhouse* を照査しながら再現し、その象徴性とインパクト、彼の役割を解明していく。Cloten が真の王子 Guiderius に首を切られ、その首を川に投げ入れられる場面や、生首や首無しの死体が舞台上に現れる場面は、*Cymbeline* という作品を演劇芸術として完成させるために必要不可欠な要素として、劇作家 Shakespeare と Armin によって作り出されたのである。Cloten や彼の斬首による死が、Guiderius の真の王子としての宮廷への帰還や Posthumus の悪徳の排除と浄化の役割を可能とする“dramaturgy”として用いられているということを論証することが本稿の狙いである。

## 序

Shakespeare 後期作品である *Cymbeline* は、Innogen と Posthumus の恋愛の成就や、Innogen と父 Cymbeline 王の和解、そして Cymbeline 王によって追放されていた Belarius と、彼によって誘拐されていた二人の王子 Guiderius と Arviragus の最終的な宮廷への帰還といった、家族の再会と和解が奇跡的に実現されるロマンス劇である。最終場面で Cymbeline 王が言い渡す“Pardon’s the word to all.”(5.5.444)という台詞の通り、全ての誤解や過ちが最終場面では許され、万事がめでたく収まり、国家の安泰と秩序の回復の中で劇は幕を閉じるのである。1870年代に *Pericles*, *The Winter’s Tale*, *Cymbeline*, *Tempest* の四作品を“the romances”と呼び、Shakespeare が“a mood of philosophical calm and otherworldliness”<sup>1</sup> のうちに生涯を終えたと初めて示唆した Edward Dowden は、これらの作品の特徴を次のように捉え、「ロマンス劇」としている。

There is a romance element about these plays. In all there is the same romantic incident of lost children recovered by those to whom they are dear— the daughters of Pericles and Leontes, the sons of Cymbeline and Alonso. In all there is a beautiful romantic background of sea or mountain. The dramas have a grave beauty, a sweet serenity, which seem to tender the name ‘comedies’ inappropriate; we may smile tenderly, but we never laugh loudly as we read them. Let us, then, name this group consisting of four plays, Romances.<sup>2</sup>

サクラソウ(primrose)(4.2.220)やイトシャジン(harebell)(4.2.221)、野バラ(eglantine)(4.2.222)のような優しい自然の美しさを持つ野の花々の咲き誇る Wales の山間で、血統に相応する気高く高潔な心を持つ二人の王子が逞しく生きる4幕からの場面は如何にもロマンスに相応しい舞台設定である。そして、そこに王女であり、妹である Innogen が、男装をしてはいるが “a fairy”(3.7.14) “An earthly paragon!” “divineness”(3.3.16)などと呼ばれ、この世の者とは思えない美しい姿で、突然彼らの住む洞窟から現れるのである。Martin Butler は義母に家を追い出され、見知らぬ森の住人の housekeeper となり、毒を飲み死んでしまうが再び息を吹き返し、最終的に恋人と再会する Innogen の物語は、Snow White の物語と類似していると指摘している。<sup>3</sup> 確かに *Cymbeline* は概してロマンスと呼ばれるに相応しい、おとぎ話の世界を有している。しかし、*Cymbeline* 4幕2場では、王子の一人である Guiderius が Cloten を残虐に斬首し、その首を川に投げ捨ててしまう。そしてその後 Cloten の首無し

死体が舞台に横たわる場面がある。多くの批評家がこれらの場面の暴力性や残虐性について触れ、ロマンス劇にこのような場面が存在することに違和感を覚えている。おとぎ話のようなロマンスとして *Cymbeline* を解釈するには不可解な場面である。しかし、これらの場面は舞台上で演じられ、演劇としてこの作品を見た場合にこそ意味をなすのである。Dowden はロマンス劇を「読む」際には優しく微笑むだけで声をあげて笑ったりはしないと記したが、実際の舞台では演出家の裁量や俳優の演じ方によって観客の爆笑すら起こり得る。Shakespeare は「劇」として作品を執筆したのであり、舞台上で演じることを目的として劇作しているということを忘れてはならない。Shakespeare が活躍した当時、Cloten は道化役者であった Robert Armin によって演じられていたと考えられている。<sup>4</sup> 本稿では、実際に Armin が Cloten を舞台上でどのように演じたのかを、他作品での彼の特徴と比較考察しながら、演劇的コンテクストにおいて Cloten 斬首が作品全体にもたらす効果と意味について論考を深める。

## 1. Robert Armin の演じた Cloten

演劇研究者である David Wiles は *Romeo and Juliet* の Q2 版のト書きに Shakespeare が ‘Enter Will Kemp’ と当時の道化役者 William Kemp の名前を直接テキストに書き込んでいることを指摘し、作品執筆中に Shakespeare が役者と役柄の区別をはっきりとしていなかったことを指摘している。<sup>5</sup> 更に、Shakespeare 自身も役者であったことや、当時は存在しなかった演出家の役割を彼が実際に劇場で担っていた可能性を考慮すれば、Wiles が指摘している通り、Shakespeare が劇作の過程で、Kemp だけではなく Hamlet などの主人公を演じた Richard Burbage などの劇団の看板役者たちが自らの創造したキャラクターを演じる姿やイメージを常に念頭に置きながら劇作していたと考えられる。Kemp が退団した後、1599 年後半頃から Shakespeare の劇団 The Chamberlain’s Men に入団した後任の道化役者 Armin についても、もちろん同じことが言えるであろう。Armin は舞台で笑いをとるだけの単純な道化役者ではなく、バラッドや戯曲、本を執筆するほど知的な才能を持ち、劇を作品として成立させるために計算された役割をこなす役者であった。Armin のために創造され、彼によって演じられたとされる道化役は *As You Like It* の Touchstone、*Twelfth Night* の Feste、*Troilus and Cressida* の Thersites、*King Lear* の Fool、*Macbeth* の Porter、*Hamlet* の Grave-digger、*Cymbeline* の Cloten、*The Winter’s Tale* の Autolycus、*The Tempest* の Trincuro (あるいは Caliban) <sup>6</sup> と考えられている。彼の演じた道化たちは、愚かな振る舞いや冗談で観客に笑われるような道化たちではなく、哲学的とも言える機知に富んだ揶揄や皮肉で普遍的真実を仄めかせながら観客を笑わせる賢

い道化たちである。Armin の演じた役柄はいずれも存在感が大きく、それぞれの作品にとって必要不可欠な役割を果たしている。Cymbeline においても、Cloten が単なる愚かな悪役以上の意味を持って登場していると考えられるが、テキストを読む限りでは自尊心に執着し欲望に支配される悪徳を体現したかのような登場人物であり、人間的深みや面白みは見出しにくい。しかし、Cloten の台詞は舞台上で Armin が実際にどう演じたかを考えた時、全く違ったイメージを浮かび上がらせる。

例えば、Cloten が 4 幕 1 場で Posthumus の衣装に腕を通し、いかに自分の体にその衣装がぴったり合うかということを誇張する場面は、Armin が演じた場合想像以上にコミカルなものになり得る。小人のように、異常に小さな体であった Armin にはおそらく Posthumus の衣装はかなり大きく、だぶだぶの衣装を纏った Armin が鏡の前で自らの姿に惚れ惚れとするこの場面は徹底して滑稽な場面になり得たという可能性を Wiles は示唆している。<sup>7</sup> 彼らの大きさの違いは Innogen が Posthumus を “eagle”(1.1.139)に例える一方で Cloten を “puttock”(1.1.140)に例えていることから読み取れる。英国土着の Golden eagle は羽根を広げた状態では 2 メートル程の大きさがあり、“puttock”はカラスよりも一回り大きい程のサイズである。5 幕 3 場では、Jupitar が雷鳴と共に eagle に乗って降臨する。この大掛かりな舞台装置は観客を圧倒し、視覚を通して eagle の壮大さを確認させてくれるものである。“eagle”に例えられた Posthumus の高貴さや壮大さは、下劣さや貪欲などに対して軽蔑を込めて使われる “puttock”とは対照的である。<sup>8</sup> Posthumus の体格の良さは、最終場面で Cymbeline 王が貧しい農夫に扮した Posthumus の戦いぶりを賞賛する台詞にも読み取れる。

Cymbeline.

Woe is my heart

That the poor soldier [Posthumus] that so richly fought,  
Whose rags shamed gilded arms, whose naked breast  
Stepped before targets of proof, cannot be found. (5.4.2-5)

Innogen を奪い合うライバルとして、きらびやかに甲冑を纏った兵士にも勝る肉体を賞賛される Posthumus は、小さな体の Armin が演じた Cloten とは対照的な姿をしていたことが読み取れる。小人である Armin の姿は明らかに舞台上で他の役者や役柄とは一線を画す存在として、観客の注意を引いたにちがいない。彼の外見と話し方は 20 年間も Cloten に会うことのなかった Belarius がすぐに Cloten だと特定できるほど特徴的である。

Belarius. Long is it since I saw him [Cloten],  
But time has nothing blurred those lines of favour  
Which then he wore. The snatches in his voice,  
And burst of speaking were as his. I am absolute  
'Twas very Cloten. (4.2.102-106)

この Belarius の台詞は、Armin が演じた Cloten が特有の体型と話し方をしてたことを裏付けるものである。王子であり、宮廷人でもある Cloten の台詞は、彼の社会的位から考えれば韻文体で書かれるはずであるが、実際には、ほとんどが散文体で書かれている。更に、彼の台詞は比較的短いセンテンスや句読点、補足的な従属節を多く含み、途切れ途切れの印象を与える特徴を持っている。Wiles は、この特徴を“halting rather than flowing”と形容し、Armin の台詞によく見られる特徴であるということを指摘している。<sup>9</sup> 更に Wiles は Armin の道化役者としての技術として“mime and mimicry”<sup>10</sup>をあげている。Armin が小さな体で Posthumus の大きな衣装を着ながら、実際に Posthumus を演じた役者を巧みに真似したと考えれば、当時のロンドンの観客たちは笑わずにはいられなかったであろう。Armin が演じた Cloten が一人で舞台に立ち、鏡に映る自らの姿にうっとりしながら、自らと Posthumus の比較を始める 4 幕 1 場は観客の笑いを誘う道化役者 Armin の見せ場である。

CLOTEN. I mean, the lines of my body are  
as well-drawn as his; no less young, more strong, not  
beneath him in fortunes, beyond him in the advantage  
of the time, above him in birth, alike conversant in  
general services, and more remarkable in single  
oppositions; yet this imperceiverant thing loves him in  
my despight. What mortality is! Posthumus, thy head,  
which now is growing upon thy shoulders, shall within  
this hour be off, thy mistress enforced, thy garments  
cut to pieces before thy face; and all this done, spurn her  
home to her father, who may heply be a little angry for  
my so rough usage; but my mother, having power of  
his testiness, shall turn all into my commendations.  
(4.1.7-17)

この場面で Armin が“the lines of my body”と言いながら、自らの小さな体に観客の注意を引きつけ、鏡の前で表情やポーズを変えながら、観客の笑いを誘った姿は容易に想像できる。ところが“*What mortality is!*”からの後半では、一変して嫉妬と怒りに満ちた残虐な復讐の計画を独白する恐ろしい台詞となる。彼が Posthumus と比較するのは、若さ、強さ、財産、将来性、生まれ、戦場での功績、一騎打ちの強さにおいてだけである。彼にとって人間の価値とは物質的、肉体的なものでしかないのである。ここで彼が羅列する比較対照となる人間の価値には、精神的な要素は何も含まれていない。彼は人間を単に死すべき運命の空虚な存在として捉えているということが明らかとなり、その後に続く打算的な Posthumus 殺害計画はより残虐に響くのである。しかし、Armin が特有の途切れ途切れの文章でたたみかけるように面白可笑しくこの台詞を捲し立て、小さな体を強調しながら観客の笑いを誘うことで、彼の残虐性や悪徳はグロテスクユーモアという道化の特権として見過ごされるのである。

Armin が演じる Cloten に、Shakespeare が用意したのは人間的理性や論理からはかけ離れた、欲望をむき出しにした完全悪を象徴するような台詞であった。Posthumus の“*mean'st garment*”(2.3.127)の価値もないと Innogen に蔑まれたことに対して激怒し、Cloten は復讐を企てる。3 幕 5 場では、Innocence を体現した Innogen の目の前で恋人を殺し、そしてその後、汚れのない彼女を強姦することを想像し、そこに“*merry*”という感情を見いだす Cloten は、その台詞を読む限りでは読者に憎悪さえ抱かせる存在である。性的欲望を食のイメージを通して表現した“*when my lust has dined*”(3.5.136)という台詞は、人間の理性が本来であれば抑え、隠すべき欲情や欲望が表面化した台詞であると言える。さらにこの台詞が完了形を用いて表現されることによって、その行為が実際に完全になされることを想像し、興奮や喜びという感情を覚えているということが読み取れる。この台詞は Cloten という人物の欲情や欲望が凝縮されて吐露した究極の表現であると言える。王妃の息子という身分であり、Cymbeline 王が Innogen の婚約者として認めた Cloten は、本来社会的地位から考えれば“*noble*”であるはずである。しかし、その内面には“*noble*”な性質は存在せず、純真無垢な Innogen を襲おうとする恐ろしい怪物のような姿を内面に隠している。

体型に不釣り合いな衣装を纏い、途切れ途切れの印象を与える散文体で、本能をむき出しにした台詞を話し、異様に小さな体の Armin が演じる Cloten は、単なる悪役としてではなく、ミクロコスモスとしての均整の取れたルネサンスの理想的人間の性質や姿の対照的人物として登場しているのである。舞台上の彼の姿は、彼の内にある悪が表面化したグロテスクな人物として観客の目に映ったにちがいない。その一方で Innogen は人間としての性質を超越した美しさや神聖さを持つ人間として描かれている。宮廷を

追放され 20 年もの間 Wales の山中に身を隠していた Belarius は、男装した Innogen の姿を初めて目にし、その美しさに人間の存在を超えるものを見だし感動する。彼は “an angel!”、“An earthly paragon!”、“divineness”(3.7.15-17)と感嘆し、美しい Innogen の姿を讃える。男装しているという事実があるにも拘らず、この世のものとは思えない 神々しい姿として Innogen は表現されているのである。Innogen が “divine Innogen”(2.1.56)と呼ばれ、その姿に人間存在を超えた神秘的力を備える人物として描かれる一方で、Cloten が “a crafty devil as is his mother”(2.1.51)と呼ばれ、本能的欲望に毒された忌み嫌うべき人物として登場するのは、Shakespeare がミクロコスモスとしての肉体を超えた神聖な性質を人間存在の中に見出すと同時に、それとは対照的な悪に取り憑かれた恐ろしい怪物の姿が人間の中に存在するということを認め、Cloten を Innogen と対局にある最も醜悪な人間の姿として措定しているのである。

Shakespeare に限らず、ルネサンスの時代、人間の内に対極的な善と悪、美と醜の性質が先天的に存在するという考え方は、芸術創作において一つの大きなテーマであった。例えば、比例と均整を体現した、ミクロコスモスとしての人間の姿をウィトルウィウスの人体比例図として表現した Leonardo da Vinci(1452-1519)は、多くの美しい聖人たちを描く一方で、醜い人々の表情を取り憑かれたように観察し、いわゆるグロテスク・ヘッドと呼ばれるデッサンも数多く残している。Leonardo の人相学(physiognomy)への関心は有名であるが、彼は美しい聖人のような青年のスケッチの隣に、これらのグロテスクな表情の人々を描き、残しているのである。専門家たちは、これらの正反対の人物が同じシートに描かれている理由を探る中で、Leonardo の心理的な歪みの表れとして見る心理学的な説や、彼が弟子達のために残した模範としてのデッサンであるという考え方、また彼が人間の特徴を体系化し始めたなどという画家としてのテクニカルな目的のためであるとする見解などを提示しているが、Frank Zöllner はこれらの見解はどれも仮説の粋を出る事はないとしている。<sup>11</sup>いずれにせよ、Leonardo da Vinci という盛期ルネサンスの巨匠は、新プロトン主義の思想に基づいた人間中心の宇宙観を持ちながら、人間が描いたとは信じ難い程の細かい絵筆の使い方、人間の姿の中に神の姿を内在させたような美しい青年や聖人たちを描き、その一方で、同時に、鉤鼻で顎がしゃくれ、額が膨れ上がった驚くほど醜い人々の顔のデッサンも多く残しているのは事実である。この事実は、彼がルネサンス人として、人間の姿かたちの中に存在する、あらゆる醜さや歪みを超えて理念化された美しい人間の姿を描きながらも、それとは相反する要素を人間の中に見出し、人間の醜さや歪みだけを抽出して捉え、怪物のような姿を同時に見ていたという事を示していると言える。

Shakespeare も同様に、Cloten を人間の内面の悪を視覚的にも投影した人物として

演劇芸術の中で描きだしているのである。しかし、悪を体現した Cloten はしばしば“fool”と呼ばれ、卑猥な冗談を交えた台詞を Armin 特有の口調で話し、道化としての歌やものまねを交えながら面白可笑しく象徴的に悪を体現した小人によって演じられたのである。そして、最終的には斬首という衝撃的な殺され方をする。これらの事実から、Cloten が観客に笑いを提供する衝撃的とも言えるインパクトを与える登場人物であり、悪徳を体現したような人物であるにも拘らずそのコミカルさ故に憎みきれない道化としての特権を有していることが分かる。しかし、彼は単に“fool”として登場し、簡単に間抜けな殺され方をするのではない。ここからは、舞台上で視覚的にも聴覚的にも究極の悪を体現した役柄として登場する Cloten が斬首される場面の演劇的コンテキストにおける意味を考えていくこととする。

## 2. Cloten 斬首の演劇的コンテキストにおける意味

Cloten を殺害するのは、本物の王子 Guiderius である。4 幕 2 場で Cloten と Guiderius が戦いながら一度舞台から姿を消し、次に Guiderius が登場する時にはすでに Cloten は首と胴体が切り離された状態となっている。Cloten の殺害現場は実際に舞台上で演じられず、Guiderius による語りにより観客に伝えられる。王子 Guiderius は舞台上に殺したばかりの Cloten の生首を持って現れ、「Cloten を殺していなければ、自らの首が切られていた」と述べる。彼が主張する Cloten 殺害の正当性は、妥当であると捉えられてしかるべきであろうが、その殺害後の台詞には後悔や Cloten への哀れみは全く感じられず、むしろ快感を覚えているかのようにさえ聞こえる。宮廷から Wales の山中へと舞台が移った直後に起こるこの殺害場面は、Wales の自然が、単に制度や秩序から解放された平穏な牧歌的社会として映し出されていないことを印象付ける。*As You Like It* の Arden の森や *Puck* の住む *A Midsummer-Night's Dream* の森のような印象とは全く異なる、残忍で野蛮な性質を帯びた舞台として Wales の自然が在り、そこに住む王子 Guiderius は王侯貴族としての高貴さを備えながらも、野生的な残忍さを秘めているということが分かる。Wales は 1530 年代に正式に England の一部とはなっていたが、England とは異なる印象を持つ土地であった。ウェールズ語が野蛮さを象徴するという理由で、公の場で使用を禁じられていた事実からも分かるように、Wales は野蛮で文明化されていない場所という印象を持っていたのである。その一方で、政治的には、Wales という国は伝説のアーサー王の出身地であり、更に英国王の長男は伝統的に“Prince of Wales”の称号が与えられるという背景からも、正当な英国の統治者が生まれる場所としての象徴性も備えていた。<sup>12</sup>つまり、この Wales で育った Guiderius と Arviragus という二人の王子は、正当な王家の血を受け継ぎながらも、荒々しい自然の中で文明社会



の悪とは無関係に育つことによって、“noble”と“natural”という共存が困難に思える二つの異なる性質を有する存在として描かれていると考える事ができる。

彼らは Wales という文明から切り離された社会においては、金や銀も価値の無いものとなり、肉体的、精神的な強さと力、そして知恵のみが財産となることを理解している。Guiderius の弟 Arviragus は“All gold and silver rather turn to dirt,/ As 'tis no better reckoned, but of those/ Who worship dirty gods.”(3.6.52-4)と述べ、Wales という厳しい自然の世界では、金や銀のような物質的価値は失われ、人間が人間たるための根本的な要素にのみ価値が見いだされる世界であるということを観客に知らせるのである。言い替えれば、Cloten が価値をおいていた宮廷でのみ効力を持つような若さや、財産、将来性、生まれなどは、Wales の森では全く価値を失うということである。“empty purse”に例えられる Cloten が虚栄そのものを象徴しているのは明らかである。さらに、舞台が Wales であることによって彼の虚栄は無意味で馬鹿馬鹿しいものであることが強調されている。

Innogen は Wales の山に飛び込み、実の兄弟である二人の王子に出会い、宮廷の悪からは切り離された自然の世界にある美德を知る。

INNOGEN. Our courtiers say all's savage but at court.  
Experience, O, thou disprov'st report!  
Th' imperious seas breeds monsters; for the dish  
Poor tributary rivers as sweet fish.(4.2.33-36)

“Th' imperious seas”つまり王やその権力によって支配された世界が“monsters”を生み出し、貧しく細々と暮らす生活の中でこそ“sweet fish”が生まれるという事実を、宮廷世界と自然の世界の両方を経験することによって知るのである。宮廷の世界から追放され、厳しい自然の世界で既に 20 年も生活してきた Belarius は、この対照的な二つの世界を Innogen 以上に経験してきている。反逆者という濡れ衣を着せられ、宮廷を追放された彼は、Cymbeline 王を含む多くの宮廷人たちと入り組んだ利害関係を持ち、彼らの善も悪も見てきたということをも 3 幕 3 場で長々と語るのである。その Belarius が Wales の山奥で育った野生的な二人の王子 Guiderius と Arviragus の中に、理想的な真の王侯貴族の性質を認めている。

BELARIUS. O thou goddess,  
Thou divine Nature, how thyself thou blazon'st

In those two princely boys! They are as gentle  
 As zephyrs blowing below the violet,  
 Not wagging his sweet head; and yet, as rough,  
 Their royal blood enchafed, as the rud'st wind  
 That by the top doth take the mountain pine,  
 And make him stoop to th'vale. 'Tis wonder  
 That an invisible instinct should frame them  
 To royalty unlearned, honour untaught,  
 Civility not seen from other, valour  
 That wildly grows in them, but yields a crop  
 As if it had been sowed. Yet still it's strange  
 What Cloten's being here to us portends,  
 Or what his death will bring us. (4.2.168-183)

スミレの下を優しく吹き抜けるそよ風と、松の木をも曲げてしまう暴風のような対極する性質が、二人の気高い王子の中に存在していることに **Belarius** は驚き、自然そのものが王子という姿を取って現れ出てきたかのように表現している。神聖な自然そのものの力が、王子に相応しい性質を彼らの内に形成し、誰から学ぶというわけでもなく、目には見えない持って生まれた彼らの中にあるものが、王侯貴族に相応しい性質や名誉へと育てているのである。王侯貴族の本来あるべき理想的姿として描かれる二人の王子たちは、宮廷から生まれたのではなく、**Wales** という“wild”な世界から生み出されたのである。人間の力を超えた、神の力で作られ神のみが操ることのできる“divine”な自然が作り出した二人の王子は、表面的な価値観に左右され、本能に支配されて殺害を企てる **Cloten** とは正反対の王子であるということが分かる。

自然の力に育てられた、正当な王の血が流れる二人の王子 **Guiderius** と **Arviragus** の二人と、母親の王との結婚という人間が作った法律によって生まれた成り上りものの王子 **Cloten** は、自然が生み出す高貴なものと、人為的につくられた下劣なものを対照的に象徴していると言える。この対照は、**Lear** 王が狂気の中で自らが正当な王であることを訴えて発する“Nature's above art in that respect.”(4.6.86)という台詞にある、“Nature”と“art”の関係を髣髴とさせる。二人の王子を育てた **Belarius** は、何度も王子の“Nature”が彼らに王子としての資質を与えていることを強調し、自らを不当に追放した宮廷に潜む奸策、“the art o' th' court”(3.3.46)について嘆くのである。自然が生み出した、宮廷や文明に汚されていない二人の高貴な王子とは対極の人格として、**Cloten**

は“the art o’ th’ court”を体現しているのである。王子 Guiderius が、Cloten の首を斬り、生首を片手に舞台上に現れる場面は、Wales が育てた文明に侵されていない、宮廷や政治の世界の汚れを知らない真の王子が、宮廷社会に蔓延る欲や虚栄といった悪を薙倒す爽快な場面として見ることができる。また、真の王子が、偽の王子から自らの地位を奪還し秩序の回復が始まる場面としても、Cloten 斬首の意味を読み取ることができる。

さらに、Cloten と Posthumus の比較から Cloten 斬首の意味を考えた場合、より興味深い象徴の意味も考えられる。Posthumus は素晴らしい容姿をした人物として劇の冒頭(1.1.22-24)でも強調されている。王である親の反対を押し切ってまで主人公 Innogen の選んだ結婚相手 Posthumus は、Cloten と正反対の登場人物であるはずである。しかしながら、Stephen Booth や Murtine Butler などの批評家はこの Posthumus と Cloten の類似性を指摘している。Booth に関しては彼らが同じ役者によって演じられていた可能性についても指摘している。<sup>13</sup> 実際の舞台においても Cloten と Posthumus という正反対かのようにも思われる二つの役柄は、同じ役者によって演じられることがある。しかし、Armin が Posthumus を実際に演じていた可能性は低いと考える。小人のような姿をした Armin が最終場面の大団円に、その勇敢な姿を Cymbeline 王に讃えられながら Posthumus として登場すれば完全に笑劇になってしまうからである。

Butler は彼らの性格と行動を分析し、実は彼らがとても似た性質を備えていることを説明している。彼は Posthumus の衣装がダブダブの状態ではなく、Cloten にぴったりと合うということをテキストのままとらえながら、彼らの肉体的な類似点に加え、彼らが二人とも横柄で、自信家でありながら不安を抱え、暴力的な傾向にあることを指摘している。その上で Cloten の存在意味と殺害の意味を次のように結論付けている。

On one level he is a parody, a clownish inversion of his rival’s refined stupidity, but he is also a demystified repetition, carrying through vicariously, even down to his dress, the violence that Posthumus would do were he in Britain. In other words, Cloten and Posthumus parcel out the devided male response to Innogen’s sexuality, Posthumus’s misogynistic anger being acted out by his double. This makes evident why Cloten has to die, and in the husband’s clothes: it kills a part of Posthumus, without which reunion is impossible.<sup>14</sup>

Cloten と Posthumus の衣装の交換とその様子については Wiles の見解とは全く異なるということは議論の余地を残すが、彼らの内面の類似性を指摘している点において

は Butler の見解に全く納得させられる。Innogen の愛する Posthumus と彼女が毛嫌いする Cloten が、実は非常に類似しているという事実は実に皮肉であると言える。しかし、確かに Posthumus が Innogen に愛されながらも彼女の愛を信用できず、Iachimo と Innogen の貞節を確認するための賭けをしたり、Iachimo の嘘を容易に信じて Innogen を殺す命令を家臣に下したりするのは、彼が英雄的性質に欠けていることを顕著に示している。この Posthumus の性格設定は明らかに意図的にされていると思われ、それゆえ Cloten との重なりも意図的に仕掛けられたようにも思われてくる。Posthumus の衣装を着た頭のない Cloten の死体が、舞台上に横たわり、その死体を見ながら Innogen が嘆くという場面は、Butler の見解を踏まえて見た場合、非常に象徴的であると言える。Posthumus の中の悪徳が Cloten という登場人物として表現され、彼の首が刎ねられることによって Posthumus の悪が同時に死に、Innogen に釣り合う人間となるという見方である。彼らが、舞台上で実際に体格の似た人物によって演じられたとしても、Armin のように小人として Cloten を演じたとしても、この象徴性は失われることはないであろう。ただ、全く異なる体格の役者が演じればよりコミカルなものになるのは確実である。さらに Armin が Posthumus のものまねをしていた可能性を考えると、“double”としてのこの二つの役柄の意味がより顕著に見えてくるのではないだろうか。当時すでに道化役者として有名であった Armin が小人として演じた Cloten が、肉体的にも悪を体現したような歪んだ姿で Posthumus のものまねをしながら登場し、彼がまるで Posthumus の代わりとして、あるいは *Cymbeline* という作品にはびこる宮廷世界の悪の象徴として、斬首され、舞台上に生首として、また首無しの死体として登場する場面は観客に大きな衝撃を与えたに違いない。

### 3. 結論

Cloten が Posthumus の衣装を身につけ、頭を切られた状態で Innogen に発見され Posthumus と間違われ、Innogen が Posthumus の死をこの場面で一旦受け入れるという Butler の見解や、アレゴリカルとも思われるほどの完全悪を体現した Cloten の性格、Armin という小人でグロテスクな道化役が Posthumus のものまねをしながらたたみ掛けるように捲きたてる話し方でコミカルに Cloten を演じたという可能性などを考慮すると、Cloten の死は Posthumus の Scapegoat 的役割を果たし、象徴的に必然として劇に存在していると見ることができる。秩序回復のための Scapegoat としての役割は道化の持つ特徴として道化研究者 William Willeford も言及している。<sup>15</sup> Cloten は斬首によって残虐に殺害され、生首となって登場するが、Armin のコミカルな道化役者としての技量や作り物の生首の扱われ方によっては残虐性やネガティ

ブな印象は完全に笑いを通してグロテスクユーモアとして解され、ポジティブで印象的な演劇的効果を齎すのである。そして、ロマンスにおける正義の勝利を視覚的、象徴的に表現した場面として、大きなインパクトを作り出すのである。最後に Cloten が舞台上に現れる場面で、彼は Guiderius に戦いの前に降参するように求めるが、Guiderius は Cloten を馬鹿にしながら次のように降参を拒否している。

Guiderius. To who? to thee? What art thou? Have not I  
An arm as big as thine? A heart as big?  
Thy word I grant are bigger: for I wear not  
My dagger in my mouth. (4.2.76-79)

ここでも体の大きさの比較によって笑いが起こり、Guiderius がこの台詞を言いながら“dagger”を取り出し、虚栄に満ちた小さな体の Armin と戦い始める場面は観客の笑いど興奮を誘ったと考えられる。そして、その直後 Guiderius が Armin の顔をした作り物の生首を持って登場する場面は、グロテスクさや残忍といったネガティブな印象を笑いによって消し去ったに違いない。Cloten が斬首によって殺害される場面は、Armin が巧みに笑いを齎すことによって作品に後味の悪さを残すようなことは全く無かったであろう。Armin の身体的特徴や役者としての技術、道化としての特徴などに関しては、未だ想像の域を超えない部分が多く、*Cymbeline* においてもはっきりとしたイメージを再現できない場面が多いのは事実である。しかし、Armin が Cloten を演じた姿を再現しながら *Cymbeline* を読むという試みは、作品にこれまでには読み取れなかった解釈の可能性を与え、演劇として作品を考える上で非常に重要な役割として Cloten が登場していたということを証明するものである。つまり、*Cymbeline* における多数の登場人物たちによる衣装の交換や、彼らの身分や出生の謎や秘密のせいで複雑化された劇構造を、一気に大団円へと導く一つの引き金となる役割を Cloten は果たしているということである。Cloten の斬首は、強烈なインパクトを持ち、*Cymbeline* という劇世界における悪の打破を象徴し、真の王子二人 (Guiderius と Arviragus) の宮廷への帰還を可能としている。さらに、Innogen の結婚相手として相応しい人物になるべく Posthumus を浄化するための Scapegoat の役割も果たしているのである。そして、最終場面における“peace”(5.5.486) が奇跡的に実現され、劇世界の秩序回復が可能となるのである。Armin は道化役者として Cloten を巧みに演じることで、斬首という殺害方法や生首の登場といったグロテスクさや残忍さを笑いによって軽減させ、*Cymbeline* に完全な平和と秩序の回復を齎し、作品を芸術として昇華するための極めて重要な役割を果たしていたのである。

注

※小論は 2014 年に関西大学大学院文学部に提出した博士学位論文『Robert Armin が演じた Shakespeare の道化たち—Shakespeare 劇における道化の演劇的發展』の第 6 章に、加筆、修正を施したものである。

<sup>1</sup> Martine Butler 編集の Cambridge 版 *Cymbeline* の“Introduction” p.6 から引用。本文の引用は全てこの版を採用している。

<sup>2</sup> William Shakespeare, *Cymbeline*, ed. Martine Butler, “Introduction” pp.6-7.

<sup>3</sup> Butler は Snow White の物語と *Cymbeline* の類似性を指摘しながらも、直接的影響は否定している。“Snow White’ was not written down until the eighteenth century, but its resemblances to *Cymbeline* tempt one to speculate that it must have been in oral circulation much earlier.” (William Shakespeare, *Cymbeline*, ed. Martine Butler, “Introduction” p.7)

<sup>4</sup> William Shakespeare, *Cymbeline*, ed. Martine Butler, “Appendices” p.210.

<sup>5</sup> David Wiles, *Shakespeare’s Clown—Actor and Text in the Elizabethan Playhouse*, p.88.

<sup>6</sup> Wiles は 1611 年頃 Armin が Caliban を演じていたとしている。しかし、役者事典などによれば、Armin は宮廷道化役の Trinculo を演じていたという可能性もある。

<sup>7</sup> David Wiles, p.154.

<sup>8</sup> *OED 2nd ed.*, puttock 1b, “Applied opprobriously to a person, as having some attribute of the kite (e.g. ignobleness, greed).”

<sup>9</sup> David Wiles, p.160.

<sup>10</sup> David Wiles, p.136.

<sup>11</sup> Frank Zöllner, *Leonardo da Vinci: Sketches and Drawings*, Kölen: Taschen, 2005, p.60.

<sup>12</sup> Jean E. Howard, “Cymbeline”, *The Norton Shakespeare Based On the Oxford Edition: Romances and Poems (Second edition)*, ed. Stephen Greenblatt, Walter Cohen, Jean E. Howard, Katharine Eisaman Maus, p.276.

<sup>13</sup> Steephen Booth, “Speculations on Doubling in Shakespeare’s Plays,” *Shakespeare: Theatrical Dimension*, ed. Philip C. McGuire and David A. Samuelson (New York: AMS Press, 1979), pp.103-131.

<sup>14</sup> William Shakespeare, *Cymbeline*, ed. Martine Butler, “Introduction” p.34.

<sup>15</sup> William Willeford, *The Fool and His Scepter*, p.101.

## Works Cited

### テキスト

- Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Agnes Latham (The Arden Shakespeare, third series) London: Methuen, 1975.
- . *Cymbeline*. Ed. J. M. Nosworthy. (Arden Shakespeare, third series) London: Thomson, 1995.
- . *Cymbeline*. Ed. Martin Butler. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- . *Hamlet*. Ed. Harold Jenkins. (Arden Shakespeare, third series) London: Thomson, 2003.
- . *The Taishukan Shakespeare: A Midsummer-Night's Dream*. Ed. Shonosuke Ishii. Tokyo: Taishukan, 1987.
- . *Troilus and Cressida*. Ed. Anthony B. Dawson. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- . *Twelfth Night or What You Will*. Ed. Roger Warren, Stanley Wells. New York: Oxford UP, 1994.

### 参考文献

- Astington, H. John. *Actors and Acting in Shakespeare's Time: The Art of Stage Playing*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Greenblatt, Stephen. Ed. *The Norton Shakespeare Based on the Oxford Edition: Romance and Poems*. 2nd ed. New York: Norton & Co, 2008.
- Gurr, Andrew. *The Shakespearean Stage 1574-1642*. 4th ed. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Kott, Jan. *Shakespeare Our Contemporary*. New York: Norton, 1974.
- Martin, Priscilla. Ed. *Troilus and Cressida—A Selection of Critical Essays*, London: Macmillan, 1976.
- McGuire, Philip C. and Samuelson, David A. Ed. *Shakespeare: Theatrical Dimension*. New York: AMS Press, 1979.
- Neasman, G. Everett. *Take My Coxcomb: Shakespeare's Clown—Servants from Late Feudal to Proto-Capitalist Economies in Early Modern England*. New York: iUniverse, 2009.
- Wells, Stanley. *Shakespeare & Co*. New York: Random House, 2006.
- Wiles, David. *Shakespeare's Clown—Actor and Text in the Elizabethan Playhouse*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Willeford, William. *The Fool and His Scepter*. Chicago: Northwestern UP, 1969.
- Zöllner, Frank. *Leonardo da Vinci: Sketches and Drawings*. Köln: Taschen, 2005.
- 中橋一夫『道化の宿命—シェイクスピアの文学』中央公論社、1948.
- G・ピコ・デッラ・ミランドラ『人間の尊厳について』大出哲、阿部包、伊藤博訳、東京：国文社、1985.

### Summary

This paper examines the theatrical role and meaning of Cloten in Shakespeare's *Cymbeline* (1609-10) by imagining how Robert Armin, who was a famous clown actor and a member of the Chamberlain's Men and the King's Men from 1599 to 1616, acted this role on the stage of the Globe in Shakespeare's time. To characterize the image of Armin, Shakespeare's other clowns, such as Touchstone in *As You Like It*, Feste in *Twelfth Night*, and especially Thersites in *Troilus and Cressida*, are compared with Cloten. Furthermore, this paper elucidates that the impact of the scenes in which Guiderius brutally cuts off Cloten's head, throws it into a river, and lays Cloten's headless corpse beside Innogen on the stage, crucially works to conclude *Cymbeline* as a work of art. These scenes make it possible to untangle the complicated characters' relationships miraculously in the end. Shakespeare and Armin (who also used to be a writer) designed and manipulated this disgusting character Cloten together as a 'dramaturgy' to complete *Cymbeline* with the real princes' return and the protagonists' romantic reunion.